〈青森県史〉の窓 185

青森市の図書館

工藤　大輔
（青森市民図書館歴史資料室室長）

大野村（現青森市）の大字大野字金沢にあった青森市立図書館
＝大正期・青森市民図書館歴史資料室所蔵

1900（明治33）年1月12日（16日とする説もある）、青森市大町（現本町）に同市で初めての図書館がオープンした。この図書館は公立の図書館ではなく、青森青年倶楽部という10人足らずの有志グループが運営した「図書部」だった。

「図書部」発足の契機について、青森県立図書館が創立50周年を記念して編集・発刊した『青森県立図書館史』（1979年、以下『図書館史』と略記）は、2か月前に公布された「図書館令」との関りを強調している。一方、地元新聞『東奥日報』を繰ってみると、1897（明治30）年4月20日付の紙面に「当地には是れまで一の遊技場もなく、只玉突場一ヶ所あるのみなるか、今度大町の三橋三吾氏発起となり、青年倶楽部を組織し図書館を設立する由なるか」とある。

すなわち、青年倶楽部の発起人たちは、すでに図書部オープンの3年前からこれを企画し、最初は自分たちの本を持ち寄り、その後は市内の蔵書家からの貸与を受けるといった努力を重ねていたのである。そしてその目的は、一種の市民娯楽を提供することにあった。なお、『図書館史』では青年倶楽部が組織されたのは1898（明治31）年4月の青森市制施行の翌月とするが、その1年前からの活動を確認することができるのである。

また『図書館史』によれば、この頃までに八戸町（現八戸市）や弘前市には図書を閲覧できる場があり、読書会の活動を行っていたようだ。さらに、1899（明治32）年2月5日付の『東奥日報』は、実業家でもあり社会事業家でもある柏原彦太郎の「青森市立図書館の設立意見」と題した論説を掲載している。

ここで柏原は、図書館を持つことは将来の市制施行に向けて「市の品位体面を揚る所以の道にあらすや」といい、図書館は市民の「智能を啓発する」場であることを説いている。こうした社会的背景を抜きにして、青年倶楽部の「図書部」設立に向けた運動を論じることはできまい。

ところで、この「図書部」はその後私立青森図書館となり、1907（明治40）年からは青森市に経営が移り青森市立図書館となった。そして、1928（昭和3）年の青森県立図書館開館の際に青森市立図書館の蔵書をすべて寄贈し、これによって「青森市所管の公共図書館が無くなったのは事実である」と『図書館史』は説く。

しかし、事実は異なり、青森市は新たに児童図書館を設置することにしたのである。市立図書館の蔵書のうち「児童の読物に適する簡易図書を県の諒解を得て保留」し、県立図書館開館の翌月に「青森市立簡易図書館」をオープンさせたのである。場所は、1925（大正14）年に大野村（現青森大野）から移転した市立図書館とおなじく、大字浦町字橋本の青森市立工芸学校内である。

この図書館の存在は、青森県統計課が編集した1929（昭和4）年の『青森県統計書』でも、県立図書館と並んで青森市内のふたつの公共図書館として、蔵書数2108冊の青森市立簡易図書館が記されていることからも確実である。ただ、いつまで存続したのかが目下分からない。1930（昭和5）年度当初には存在しているが…今後の課題である。

青年倶楽部の図書部がオープンして昨年120年を迎えた。これを機会に青森市に存在した図書館のあゆみを再検証してみるものいいのではないか。

『東京と青森』634号
東京青森県人会　2021年2月